

中国ツングース諸語の親縁関係

白 応 鎮

- 1 中国のツングース諸語
 1. 1 女真語
 1. 2 満州語
 1. 3 シボ語(錫伯語 Xibe)
 1. 4 エウエンキ語(鄂温克語 Ewenki/Solon)
 1. 5 オロチョン語(鄂倫春語 Oroqen)
 1. 6 ホジェン語(赫哲語 Hezhe)
- 2 ロシアのツングース諸語
 2. 1 エウエンキ語(Evenki)
 2. 2 エウエン語(Even, Lamut)
 2. 3 ネギダル語(Negidal)
 2. 4 ウデヘ語(Udehe, Udege)
 2. 5 オロチ語(Orochi)
 2. 6 ナナイ語(Nanay, Goldi)
 2. 7 オルチャ語(Olcha, Ulcha)
 2. 8 オロッコ語(Orok, Uilta)
- 3 中国ツングース諸語の親縁関係

キーワード：ツングース諸語、中国、親縁関係、音韻対応、ロシア、女真語

ツングース語は、狭義にはエウエンキ語の別称で、広義には満州語を除くツングース語諸語をさす。さらに広義では満州語を含むツングース語全体をさしもする。本論文でツングース語というの満州語を含むツングース語全体の意味で使う。ツングース語を記述するとき、まず直面する問題はツングース語の名称である。これまでツングース語の専門家達が使って来たツングース語の名称が異なり、混乱している。この種の混同がないようにするのが緊

要である。本論文では、ツングース語を中国のツングース語とロシアのツングース語に二分したうえで、ツングース語の名称と分布を同語根語と対応基礎語彙を根拠に明らかにする。次いで、中国ツングース語の親縁関係に関して、ツングース語のなかで最古の記録を保存している女真語の同語根語とツングース語の間に見える音韻対応を根拠にして、親縁関係を記述する。

中国のツングース語は、女真語、満州語、シボ語(錫伯語)、エウエンキ語(鄂温克語)、オロチョン語(鄂倫春語)、ホジェン語(赫哲語)等で、中国東北地方の黒龍江省と内蒙古と新疆の伊犁市などに分布している。1982年の人口統計によると、中国ツングース諸民族の人口は4,07,7394人である。ロシアのツングース語は、エウエンキ語(Evenki)、エウエン語(Even)、ネギダル語(Negidal)、ウデヘ語(Udehe)、オロチ語(Orochi)、ナナイ語(Nanay)、オルチャ語(Olcha)、オロッコ語(Orok)等で、東シベリアおよび極東のエウエンキ自治専区、ヤクート自治共和国、ブリヤート自治共和国、ハバロフスク辺境区、沿海辺境区、サハリン州、カムチャッカ州、マガダン州などの地域に分布している。1970年の人口統計によると、旧ソ連のツングース諸民族の人口は40,721人なのだが、そこにはオロッコ人の人口は含まれていない。

1 中国のツングース諸語

1.1 女真語

女真語とは中国の東北地方に金（1145–1234）を建てた女真族の言語で、歴史上ツングース語として、初めて現れたのがこの女真語である。明代（1368–1644）まで用いられたが今日では死語となっている。女真族は女真文字を用いて女真語を書いた。金代の女真語は「大金得勝陀頌碑」などの碑文や印や鏡の銘文などに残る。また、『金史』のような史書にも、女真語の多くの人名、地名などが、漢字で記されて残っている。『金史』に付された「金国語解」、あるいは「欽定金国語解」や、さらには「欽定遼金元三史国語解」（1781）のなかの「金国語解」は、それらの単語を訳解している（池上二郎 2000）。

ペリオ（Pelliot 1925）は『金史』の女真語単語を調査研究して、ツングース祖語の語頭の *p- を金代の女真語が保持していることを明らかにした。

(1)

ツングース祖語 (Pelliot 1925) 金代女真語 (Pelliot 1925)

*polu	p'o-lou	'marteau'
*puyañun	p'ou-yang-wen	'dernier fils'
*puladu	p'ou-la'-tou	'aux yeux rouges'
*pulχun	p'ou-lou-houen	'sac de tolie'

明代（1368–1644）の女真語は「永寧寺碑」のような碑文の他に『華夷訳語』中の「女真館訳語」に見られる。今日利用しうる資料としては、この「女真館訳語」がもっとも重要で、871項目の「雑字」（語彙）20の「来文」（上秦文テキスト）からなっている。Kiyose（1977）は「女真館訳語」の女真語を復元して詳しく記述している。一方金啓祿の『女真文辞典』（1984）は女真文字を部首別に配列して、表音、意味、

用例等を加えた一種の字典で、巻末に、ローマ字引きの語句索引を付している（池上二郎 2000）。この『女真文辞典』は明代女真語を詳しく説明している。

(2)

金代女真語 (1115–1234)	清代満州語 (1644–1911)	
p'o-lou	folgo	かなづち
p'ou-yang-wen	fiyanggū	末子
p'ou-la-tou	fulata	頭のあたりの赤い
p'ou-lou-houen	fulhūn	大袋

金代女真語が保存したツングース祖語の語頭の *p- は明代の女真語に至って摩擦音 f- に変化し、(2)の例に見えるように、清代の満州語が継承した。この語頭の f- は明代女真語の特徴の一つである。

(3)

金代女真語 (1115–1234)	明代女真語 (1368–1644)	清代満州語 (1644–1911)
p-	f-	f-

もう一つ明代女真語の特徴はツングース祖語の *di と *ti の保存である。Kiyose（1977）が復元した「女真館訳語」の女真語はツングース祖語の *di と *ti をそのまま保持している。

(4)

明代女真語 (Kiyose 1977)	語彙項目	清代満州語
bandi-	生	388 banji-
dilgan	声	780 jilgan
diramei	厚	692 jiramin
dondi-	聞	351 donji-
hadi	貴	281 haji
tati-	学習	805 taci-
tifa	泥	060 cifaha
tiko	鶏	161 coko
tinda-	放	400 sinda-
tireku	枕	550 cirku
tuti-	出	025 tuci-

「女真館訳語」の女真語が示すもう一つの特徴はツングース祖語の語中母音間の閉鎖音 *-g- の変化である。この *-g- は保持されている場合、弱化している場合、そして消失している場合とがある。(5)は語中母音間の -g- が保存されている例を見せる。

(5)

明代女真語 (金啓琮 1984)	頁	明代女真語 (金啓琮 1984)	頁
aga	雨 15	bogu	家族 43
bogo	房 43	dagi	以首 12
bugu	鹿 112	digasa	近 17
digun	来 221	dugi	可 227
dugumei	遊 38	eigisa	不可 201
fagie	充 218	fuli-gi	命 226
xagan	皇帝 9	sadugai	親 241
sugu	皮 136	togo	線 149
tugi	雲 101	uligi	卷 28

(5)とは対照的に、(6)は語中母音間の -g- が消失または半母音に弱化している例である。

(6)

明代女真語	清代満州語	オロチョン語	エウエンキ語
te-	te-	təgə	təgə 座
juwa erin	juwari	ɬoga	ɬoga 夏
tuwe	tuwa	təgɔ	təg 火
tuwe erin	tuweri	tuwə	tug 冬
biya	biya	bEEga	bEEga 月

要約すれば、ツングース祖語の *di と *ti を、金代の女真語と明代の女真語は継承し、保存している。ツングース祖語の語頭の *p- と母音間の *-g- の明代女真語における対応音は f- -g/φ/w/y- である。

(7)

ツングース祖語	金代女真語	明代女真語
*p-	p-	f-
*di	di	di
*ti	ti	ti
*-g-		-g/φ/w/y-

1. 2 満州語

明代末期満州族の興起とともに、彼らの言語である満州語が歴史上に現れてくる。満州語の文語は、はじめ、無圏点満州字で書かれたが、その後は有圏満州字で書かれるようになる。普通満州語というのは、清代(1644-1911)に中国東北地方に居住していた満州族が使った言語で、満州字で書かれた清代の満州語である。この清代の満州語は満州語書面語または満州語文語とも言われる。20世期中葉に入って、清代の満州語は死語となってしまった。今日満州語は遠く新疆の西辺で、18世期なかごろに満州から移住した錫伯族によって使われている。現代満州語はそのほか、東北部の北の黒龍江省愛輝地方の大五家子満族村と富裕県三家子満族村、泰来県以布氣満族村等わずかな部落で話されるぐらいになってある。大五家子満族村は河野六郎が1941年に実地調査して、「満州国黒河地方に於ける満州語の特色」という論文を1944年に発表した。富裕県三家子満族村は清格爾泰、恩和巴図が1961年に現場訪問調査して、清格爾泰が1982年に「満州語口語語音」という論文を発表し、恩和巴図は『満語口語研究』という著作を1995年に出版した。以布氣満族村の満州語は趙傑が1985年にフィールドワークをして1989年に『現代満語研究』を出版した。1960年代の三家子満族村と以布氣満族村の満州語を1941年の大五家子満族村の満州語と比べて見ると、1960年代の満州語は完全な母国語の話し手が話しているものではないことが分かる。1982年の統計によると、満州族の人口は4,299,199人で、その中満州語を話せる人は、黒龍江省の満州村の60歳以上の老人で、その数も約20人だけである(朝克 2002)。現代満州語も清代満州語と同じく死語になって、完全な母国語として満州語を話す人は21世期に入って存在しないだろう。他方清代の満州語は新疆の錫伯族が継承して使っている。この錫伯族の満州語はシボ語(錫伯語)

と呼ばれる。

清代の満州語を明代の女真語と比べてみると、金代女真語と明代女真語まで保存されていたツングース祖語の *di と *ti が口蓋音化して、ji と ci に変化している。

(8)

ツングース祖語	金代女真語	明代女真語	清代満州語
*p-	p-	f-	f-
*di	di	di	ji
*ti	ti	ti	ci

1. 3 シボ語 (錫伯語 Xibe)

シボ語は中国のシボ族が使う言語で、1982年の統計によると、シボ族の人口は83,629人である。シボ族の祖先はハイラルの東南部にあるジャラントロ河の流域に居住していた。17世紀半ば以降は、八旗蒙古と八旗満州に編入された。1760年に清朝政府は東北八旗の中から1,020人のシボ族官兵を選んで、その家族3,270人とともに新疆の利犁に移住させた。1766年に利犁河の南岸の地区に進駐したシボ族は、他の民族との接触が比較的少なく、居住形態も集中しており、そのため、比較的良好に自民族の言語と文字を保持した。新疆シボ族の小学校では一年生から三年生の児童にシボ文を教えている (朝克 2002)。このように、シボ族の言語は特有の生命力を今日まで保持してきたのである。

シボ語について、あるひとは満州語の方言であるとか、古満州語であるとか、生きている満州語であるといった主張をしているが、シボ語は清代17世期の満州語との間に密接な関係があるのは間違いない。筆者の研究によれば (Baek 2001, Baek 2002)、現代シボ語は18世期満州語の音韻体系を体系的に良く継承している。現代シボ語と18世期満州語との間に何らかの音韻変化があっても、それは規則的である。現代シボ語の典型的な特徴は前舌円唇母音 æ と ü である。

1. 4 エウエンキ語 (鄂温克語 Ewenki/Solon)

エウエンキ語は中国のエウエンキ人が使う言語である。この中国のエウエンキ語はアルタイ学界 (Poppe 1965) では Solon と呼ばれる。エウエンキ人は内蒙古自治区と黒龍江省に住んでいる。1982年の統計によると (馬寅 1984)、エウエンキ人の人口は19,343人である。各地のエウエンキ人には歴史的変遷、居住環境、生活様式等の相違があるためエウエンキ語には様々な発展と変化があり、エウエンキ語内部で音韻構造と文法の一部に違いを持つ地方方言が生まれた。もっとも代表的なのはホイ河、メリゲル河、オルグヤ河の三大方言である。ホイ河方言はソロン語 (Solon) と呼ばれるもので、この方言を使うエウエンキ人は内モンゴル自治区と黒龍江省に広く分布し、使用人口はエウエンキ人の90%を占める。メリゲル河方言はツングース語 (Tungus) と呼ばれるもので、この方言を使うエウエンキ人は主に内モンゴル自治区に居住し、使用人口はエウエンキ人の8%前後を占める。オルグヤ河方言はヤクート語と呼ばれるもので、この方言は内モンゴル自治区ホロンバイル盟根河市オルグヤエウエンキ族郷およびオロチョン自治旗に分布する。使用人口はエウエンキ人の1.2%にすぎない。

エウエンキ語にはツングース祖語と金代女真語の母音間の -g- と di/ti がそのまま保持されている。けれども、金代女真語の語頭の p- は消失している。

(9)

金代女真語	エウエンキ語 (胡 2001)	清代満州語	
p-	alxa	folho	小鉄
di	baldi-	banji-	生
ti	tati-	taci-	学習
-g-	togo	te-	座

1.5 オロチョン語 (鄂倫春 Oroqen)

オロチョン語は中国のオロチョン人の使用する言語である。このオロチョンという名称は民族自身の自称で、このオロチョン族のオロチョン語を Poppe (1965) は一つの言語として認めていない。アルタイ学界では一般的にオロチョン語はロシアのエウエンキ語に含まれている。オロチョン人は主に内モンゴル自治区のオロチョン自治旗、モリタワダフル族自治旗、札蘭屯市や黒龍江省の塔河県、呼嗎県、遜克県および黒河市などに住んでいる (朝克 2002)。1982年の統計によると、オロチョン人の人口は4,132人である。

オロチョン語にはエウエンキ語と同じように、金代女真語の母音間の -g- と di/ti が保存されている。けれども、金代女真語の語頭の p- は消失している。

(10)

金代女真語	オロチョン語	エウエンキ語	清代満州語
p-	əmun	əmmə	femen
di	do:ldi-	doldi-	donji-
ti	tat-	tati-	taci-
-g-	təgə	təg	tuwa

このように、オロチョン語とエウエンキ語との間には密接な関係があるのだが、中国政府はオロチョン族をエウエンキ族とは別の民族として、一つの少数民族と認めている。さらにまた、筆者の調査によれば、オロチョン語とエウエンキ語の間には次のような差異点が見られる。

1) オロチョン語の語末の母音はエウエンキ語では消失している。

(11)

エウエンキ語 (胡 1997)	オロチョン語 (胡 1997)		語彙項目番号
bəg	buga	空	0001
ur	urə	山	0026
səl	sələ	鉄	0040
təg	təgə	火	0049
sər	sura	蚤	0194

2) オロチョン語の語末の歯茎鼻音はエウエンキ語では軟口蓋鼻音に変化している。

(12)

エウエンキ語 (胡 1997)	オロチョン語 (胡 1997)		語彙項目番号
saŋaŋ	aŋŋan	煙	0050
aaŋ	aan	右	0061
tarigaŋ	targaŋ	田	0030
mugaŋ	mowon	銀	0038
məriŋ	muriŋ	馬	0114

3) オロチョン語の軟口蓋閉鎖音はエウエンキ語では軟口蓋摩擦音が対応音になっている。

(13)

エウエンキ語 (胡 1997)	オロチョン語 (胡 1997)		語彙項目番号
xuniŋ	kUnin	羊	0123
xandu	kandu	稲	0221
xowoŋ	kuwun	綿	0231
xaxara	kakara	猫	0147
uxur	ukur	牛	0106

4) オロチョン語の語中二つの別の子音はエウエンキ語では前の子音が後の子音に同化して、同一子音の重畳子音になっている。

(14)

エウエンキ語 (胡 1997)	オロチョン語 (胡 1997)		語彙項目番号
sabbatta	sarbaktan	爪	0207
adde	agdi	雷	0005
igga	ilga	花	0259
ukku	urkə	戸	0438
irittə	riktə	蟻	0190

1.6 ホジェン語 (赫哲語 Hezhe)

ホジェン語は中国のホジェン人が使う言語である。ホジェン人は居住地域によってそれぞれ「ナナイ」、「ナベイ」、「ナニャオ」等と自称している。そのほか、ホジェン人はまた松花江河岸のチンドリを境にして、上流に住む者はチロエン (Kilen) を自称し (ナベイ人、ナニャオ

ホジェン人をふくむ)、下流に住む者はホジェン(赫哲)を自称している(ナナイホジェン人えを含む)。「赫哲」は「赫真」という言葉が発展したものだと言われる。1982年の統計によると、ホジェン人の人口は1,746人である。

ホジェン人は金朝時代(1115-1234)と明朝時代(1368-1644)には野人女真と称し、清朝時代(1644-1911)には野人女真または女真と称したと言われる。これは、ホジェン人が中国の東北地方に金国を建てた女真族と清朝の満州族と密接な関係があることを暗示しているように思われる。ホジェン族が女真族と関係があるのは間違いないと思う。しかしながら、同語根語が示す音韻対応によると、ホジェン語と清代満州語との関係は密接なものではない。ホジェン語は金代女真語の di と ti を保持している。それとは対照的に、清代満州語ではホジェン語の di と ti が口蓋化して ji と ci になっている。

(15)

金代明代女真語	ホジェン語 (胡 2001)	清代満州語	
dondi-	doldi-	donji-	聴
bandi-	baldi-	banji-	生
tati-	tati-	taci-	学習
tiko	təqan	coko	鶏

中国のホジェン語について、アルタイ学界ではホジェン語とロシアのナナイ(Nanay)との間の密接な関係を認めてホジェン語をナナイ語と呼んでいる。これはホジェン語がナナイ語と同一の言語であることを暗示している。けれども、ツングース祖語と金代女真語の語頭の *p- はロシアのナナイ語(Nanay)では変化なく、そのまま p- が保存されている。これとは対照的に、ホジェン語には語頭の *p- が摩擦音 x- に一律に変化している。これは、ホジェン語とナナイ語との関係が遠いことを示している。勿論、中国のホジェン語はロシアのナナイ語と同一のものではない。

(16)

ロシアのナナイ語 (胡 2001)	中国のホジェン語 (胡 2001)	
pəmun	xəmun	唇
pə:	χakin	肝
pəru:	xəiki	袴子
paloa	χalqə	錘子

2 ロシアのツングース諸語

2.1 エウエンキ語(Evenki)

エウエンキ語はロシアのエウエンキ人が使う言語である。ロシアのエウエンキ人は主にロシアのエウエンキ自治官区、タイムル自治管区、ブリヤート自治共和国、イルクーツク洲、トムスク洲、チタ洲、ハバロスク地区、サハリン北部といった広範な地域に住んでいる(朝克 2002)。1970年の統計によると、エウエンキ人の人口は25,149人で、そのうち自民族言語を用いる者が約50%(12,899人)を占めている。

ロシアのエウエンキ語(Evenki)は中国のエウエンキ語にかなり近いと言われている。既に述べたように、中国のエウエンキ語は中国の少数民族の一つであるエウエンキ族が使っている言語で、アルタイ学界ではソロン語(Solon)という名で知られている。

ロシアのエウエンキ語(Evenki)と中国のエウエンキ語(Solon)には、金代女真語の di /ti と母音間の -g- が保存されている。しかしながら、金代女真語の語頭の p- はロシアのエウエンキ語(Evenki)では摩擦音 h- に変化している。一方中国のエウエンキ語(Solon)ではこの p- が消失している。

(17)

ロシアのエウエンキ語 (胡 2001)	中国のエウエンキ語 (胡 2001)	
do:ldi-	dəldi-	聴
diram	dirami	厚

təvə-	təgə-	座
halka	alxa	錘
hərki	əkki	ズボン

2. 2 エウエン語 (Even, Lamut)

エウエン語はエウエン人の使用する言語である。エウエン人は主にレナ川以東の西シベリア、ヤクート自治共和国東北部、マガダン洲、カムチャッカ洲北部・中部およびオホーツク一帯の広範な地域および沿海地区に居住する（朝克 2002）。エウエンはその民族の自称で、エウエン人はラムート人とも呼ばれる。そのため、エウエン語はラムート語とも呼ばれる。1970年の統計に依ると、エウエン人の人口は12,029人で、そのうち、約56%（6736人）が自民族の言語を使用している。

エウエン語はエウエンキ語とかなり近い。エウエン語とエウエンキ語には金代女真語の di/ti と母音間の -g- が保存されている。金代女真語の語頭の p- の対応音も同一の摩擦音 h- である。

(18)

エウエンキ語 (胡 2001, 池上 2000)	エウエン語 (胡 2001, 池上 2000)	
ha:kin	ha:gam	肝
halka	halqa	錘
do:lɔ-	dolda-	聴
diram	diram	厚
təvə-	təv-	座

2. 3 ネギダル語 (Negidal)

ネギダル語はロシアのネギダル人が使用する言語である。ネギダル人はハバロフスクのベリング河口にあるアムール江一帯に居住している（朝克 2002）。1970年の統計によると、ネギダル人の人口は537人で、そのうち約50%（286人）が自民族の言語を使用している。

ネギダル語には、ツングース祖語の di/ti と

母音間の -g- が保持されている。けれども、金代女真語の語頭の閉鎖音 p- は摩擦音 x- に変化している。

(19)

金代女真語 (胡 2001, 池上 2000)	ネギダル語	清代満州語	
dondi-	doldi-	donji-	聴
diramei	dɪjam	jiramin	厚
	təvə-	te-	座
	joga	juwari	夏
p'o-lou	xalka	folho	錘

2. 4 ウデヘ語 (Udehe, Udege)

ウデヘ語はロシアのウデヘ人が使用する言語である。ウデヘ人は主にウスリー川西岸の支流地域およびシュウオタイ・アリン山地域に住む（朝克 2002）。1970年の統計によると、1,469人の人口を有する。そのうち、約55%（809）が自民族の言語を使用している。

ウデヘ語には、金代女真語の di/ti がそのまま保存されている。しかしながら、金代女真語の語頭の p- は摩擦音 x- に変化し、また、ツングース祖語の母音間の *-g- は消失している。

(20)

金代女真語 (胡 2001, 池上 2000)	ウデヘ語	清代満州語	
dondi-	dogdi-	donji-	聴
diramei	deæmi	jiramin	厚
p'o-lou	xalka	folho	錘
	tə-	te-	座
	jua	juwari	夏

2. 5 オロチ語 (Orochi)

オロチ語はロシアのオロチ人が使用する言語で、オロチ人は主にハバロフスク辺疆区およびアムール川とトムニン川の一帯に住んでいる（朝克 2002）。1970年の統計によると、1,089人の人口があり、そのうち約50%（529人）が自

民族の言語を使用している。

オロチ語には、金代女真語の語頭の p- と di/ti が保存されている。けれどもツングース祖語の母音間の *g- は消失したり、弱化して、半母音 -w- がその対応音になっていたりする。

(21)

金代女真語	オロチ語 (胡 2001, 池上 2000)	清代満州語	
dondi-	do:gdi-	donji-	聴
diramei	dijami	jiramin	厚
p'o-lou	palo	folho	錘
	tə-	te-	座
	juwa	juwari	夏

2. 6 ナナイ語 (Nanay, Goldi)

ナナイ語はロシアのナナイ人が使用する言語である。ナナイ人は主にアムール河下流沿岸およびサハリン地区やウスリー川支流のビジン川流域に居住している (朝克 2002)。ナナイはこの民族の自称である。ある者はナナイ人をゴールド人とよぶ。そのためナナイ語はゴールド語とも呼ばれる。1970年の統計によると、10,005人の人口があり、そのうち約70% (6,911人) が自民族の言葉を使用している。

ナナイ語には、金代女真語の語頭の p- が保存されている。けれども金代女真語の di/ti はそのまま保持されている場合もあるし、口蓋音化しているものもある。またツングース祖語の母音間の *g- は消失している。

(22)

金代女真語	ナナイ語 (胡 2001, 池上 2000)	清代満州語	
p'o-lou	paloa	folho	錘
dondi-	do:lǰi-	donji-	聴
diramei	dirami	jiramin	厚
	tə:-	te-	座
	joa	juwari	夏

2. 7 オルチャ語 (Olcha, Ulcha)

オルチャ語はロシアのオルチャと呼ばれる人々が使用する言語である。オルチャ人は主にアムール川下流に居住している (朝克 2002)。1970年の統計によると、2,448人の人口があり、そのうち約60% (1,489人) が自民族の言語を使用している。

オルチャ語には、金代女真語の語頭の p- と di/ti がそのまま保存されている。しかしながら、ツングース祖語の *g- は消失しているものもあるし、半母音 -w- に弱化しているものもある。

(23)

金代女真語	オルチャ語 (胡 2001, 池上 2000)	清代満州語	
p'o-lou	paloa	folho	錘
dondi-	do:ldi-	donji-	聴
diramei	dirami	jiramin	厚
	tə:-	te-	座
	juwa	juwari	夏

2. 8 オロッコ語 (Orok, Uilta)

オロッコ語はロシアのオロッコ人が使用する言語である。オロッコはその民族の自称である。オロッコ人は主にサハリン中部と北部の山林および沿海地区に住んでいる (朝克 2002)。20世紀30年代の人口統計によると、当時のオロッコ人は400人余りいたが、40年代前後に一部のオロッコ人が日本の網足地区に移住した。この日本に移住したオロッコ人はウイльта人と呼ばれた。そのためオロッコ語をウイльта語とも呼ぶ。旧ソ連の1970年の人口統計には、オロッコ人の人口は載っていない。

オロッコ語には金代女真語の語頭の p- がそのまま保存されている。しかしながら、金代女真語の di/ti は口蓋音化している。ツングース祖語の母音間の *g- は保存されているものもあるし、消失したものもある。

(24)

金代女真語	オロッコ語 (胡 2001, 池上 2000)	清代満州語	
p'o-lou	palo	lho	錘
dondi-	do:l̥i-	donji-	聴
diramei	ɕiramɪ	jiramin	厚
	tə:-	te-	座
	duga	juwari	夏

3 中国ツングース諸語の親縁関係

池上二郎 (1974) はツングース諸語の音韻対応現象と人称接辞の有無を条件としてツングース諸語を四群にわけた。一方朝克 (2001) は音韻対応の現象、母音調和の現象、名詞の格形態、形容詞の級形態の構造、動詞の形態変化、外来語の影響等を根拠として、ツングース諸語を満州語支とツングース支に分け、それからツングース支をツングース南支とツングース北支に分けた。満州語支は女真語、満語、シボ語を含む。ツングース南支はナナイ語、ホジェン語、ウデヘ語、オロチ語、オロッコ語、オルチャ語を含む。ツングース北支はエウエンキ語 (ロシア)、エウエン語、ネギダル語、エウエンキ語 (中国)、オロチョン語を含む。一言で言えば、ツングース諸語の音韻対応と形態対応を分類基準としてツングース諸語を分類した。けれども、このような分類基準は現代の歴史言語学では受容できないし、ツングース諸語の親縁関係を明かにすることができない。歴史言語学では、Poppe (1965) の記述に見えるように、同語根語の音韻対応現象だけが受容できる分類基準で、これによって言語の親縁関係が明瞭になる。

筆者は本論文で音韻対応現象だけを分類根拠として、ツングース諸語の親縁関係を記述する。この音韻対応現象もツングース諸語の中で最古の記録を見せる女真語の同語根語の音韻対応を基準とする。前述したように、金代の女真語は

ツングース祖語の語頭の閉鎖音 *p- と *di/ti を保持している。これらは現代の満州語とシボ語、ホジェン語、エウエンキ語、オロチョン語に次のように反映している。

(25)

女真語	満州語	シボ語	ホジェン語	エウエンキ語	オロチョン語
p-	f-	f-	x-	φ-	φ-
di	ji	ji	di	di	di
ti	ci	ci	ti	ti	ti

Poppe (1965) はツングース祖語の母音 *-g- を保持しているツングース語支とこの *-g- が消失している満州語支に分けた。ツングース語支はロシアのエウエンキ語、エウエン語、ネギダル語、ソロン語 (中国のエウエンキ語) を含む。これらの言語ではツングース祖語の母音間の *-g- が保存されている。

(26)

エウエンキ語	エウエン語	ネギダル語	ソロン語 (中国エウエンキ語)	
təvə-	təv-	təvə-	tagə-	座
jugə	jugani	joga	jugə	夏

また Poppe (1965) が指摘したように、満州語支のナナイ語、オロチ語、ウデヘ語、オルチャ語にはツングース祖語の母音間の *-g- が一律に消失している。

(27)

ナナイ語	オロチ語	ウデヘ語	オルチャ語	
tə:-	tə:-	tə:-	tə:-	座
joa	juwa	jua	juwa	夏

これとは対照的に、明代女真語と清代満州語にはツングース祖語の母音間の *-g- が不規則的に反映している。この *-g- が消失しているものもあるし、弱化して半母音になっているものもある。

(28)の例は、ツングース祖語の *-g- が明代女真語と清代満州語で消失したり、半母音 -w- や -y- に変化している場合である。

(28)

明代女真語	清代満州語	オロチョン語	エウエンキ語	
te-	te-	təgə-	təgə-	座
juwa erin	juwari	ɕoga	ɕoga	夏
tuwe	tuwa	təgə	təg	火
tuwe erin	tuweri	tuwə	tug	冬
biya	biya	bEEga	bEEga	月

一方母音間の *-g- が明代女真語と清代満州語で保存されているものもある。(29)は明代女真語で *-g- を保持している例である。

(29)

明代女真語 (金啓祿 1984)	頁	明代女真語 (金啓祿 1984)	頁
aga	雨 15	bogo	房 43
bogu	家族 43	bugu	鹿 112
dəgə	高 6	digasa	近 17
digun	来 221	dugi	可 227
xagan	皇帝 9	sugu	皮 136
tugi	雲 101	udigə	野 53

(30)は清代満州語で *-g- が保存されている例である。

(30)

清代満州語		清代満州語	
aga	雨	ajige	小さい
bigan	野原	boigon	家産
dogo	盲目	dogon	渡し場
eigen	夫	haga	魚の骨
jugūn	路	neigen	平均の
sogi	菜類	tugi	雲

前述したとおり、Poppe (1965) はツングース祖語の母音間の *-g- の消失と保存を根拠として、ツングース諸語をツングース語支と満州語支に両分した。しかしながら、満州語支の女真語と満州語では *-g- の消失と保存が不規則的である。そのため現代ツングース諸語に見える母音間の *-g- の反射音を分類基準にするのは無理だと思う。

本論文では Poppe (1965) が使った二番目

の基準であるツングース祖語の語頭の *p- の発展と前舌高母音 i の前の歯茎閉鎖音 *d と *t の口蓋音化を基準として、中国のツングース諸語の親縁関係を記述する。

ツングース祖語の語頭の *p- と *di/ti は中国のツングース諸語には次のように反射している。

(31)

女真語	満州語	シボ語	ホジェン語	エウエンキ語	オロチョン語
p-	f-	f-	x-	φ-	φ-
di	ji	ji	di	di	di
ti	ci	ci	ti	ti	ti

ツングース祖語の語頭の *p- と *di/ti が金代女真語ではそのまま保持されている。この金代女真語の期間には、他のツングース諸語でも祖語の語頭の *p- と *di/ti が保存されていたと推測する。この金代女真語の段階を女真語、満州語、ホジェン語、エウエンキ語、オロチョン語の共通語段階と呼ぶ。

(32)

ツングース祖語	女真語/満州語/ホジェン語/エウエンキ語/ オロチョン語の共通語
*p-	p-
*di	di
*ti	ti

金代の女真語では明代に至って、語頭の p- が摩擦音 f- に変化する。この段階前後に、他のツングース諸語でも軟口蓋摩擦音 x- に変化したと推測される。この明代女真語段階はホジェン語、エウエンキ語、オロチョン語の共通語段階だったと思われる。

(33)

明代女真語/満州語	ホジェン語/エウエンキ語/オロチョン語の 共通語
f-	x-

明代女真語は清代満州語に至って、金代明代女真語までは保存していたツングース祖語の di/ti が口蓋音化して ji/ci に変化している。他のツングース諸語では di/ti が何の変化もなく、

そのまま保存されている。この段階で、エウエンキ語とオロチョン語では語頭の軟口蓋摩擦音 x- が消失したと推測する。

(34)

清代満州語	ホジェン語	エウエンキ語/オロ チョン語の共通語
ji	di	di
ci	ti	ti
f-	x-	φ-

次の段階は20世紀現代ツングース諸語の段階が継承して、清代満州語からは現代シボ語が分裂し、エウエンキ語とオロチョン語の共通語がエウエンキ語とオロチョン語に分岐したと推測される。

(35)

現代満州語	シボ語	ホジェン語	ウエンキ語	オロチョン語
f-	f-	x-	φ-	φ-

前述したように、現代シボ語は18世紀満州語の音韻体系を体系的に継承している。現代シボ語と18世紀満州語との間にどのような音韻変化があっても、この音韻変化は規則的である。その中でも現代シボ語の典型的な特徴は前舌円唇母音 æ と ü の音韻化である。

(36)

清代満州語	現代シボ語	
dobi	dæv	狐
morin	mærin	馬
sogi	sægi	野菜
šumin	xumin	深い
turi	türü	豆
tuweri	tür	冬

またエウエンキ語とオロチョン語の共通語が分岐した代表的な音韻変化は語末母音の保持と消失である。(11)の例に見えるように、オロチョン語では語末母音が保持され、それとは対照的にエウエンキ語では語末母音が消失している。

このように、ツングース祖語に由来する金代女真語の語頭の p- と di/ti の音韻対応現象を

根拠として、中国の現代ツングース諸語の親縁関係を明瞭に記述することが可能だと思われる。

参考文献

- 池上二郎「ツングース諸語」『世界言語学大辞典』東京：三省堂、2000.
- 朝克『中国ツングース諸語対照基礎語彙集』小樽：小樽商科大学言語センタ、1997.
- 『ツングースの民族と言語』仙台：東北アジア研究センタ、2002.
- 津曲敏郎「女真語」「ソロン語」『世界言語学大辞典』東京：三省堂、2000.
- 安俊『赫哲語簡志』北京：民族出版社、1986.
- 胡增益『鄂倫春語簡志鄂』北京：民族出版社、2001.
- 金啓琮『女真文辞典』北京：文物出版社、1984.
- 劉忠波『赫哲人』北京：民族出版社、1981.
- 呂光天『鄂温克族』北京：民族出版社、1983.
- 馬寅(主編)『中国少数民族常識』北京：中国青年出版社、1984.
- 清格爾泰「満州語口語語音」『内蒙古大学紀念校慶二十五周年學術論文集』内蒙古：内蒙古大学出版社、1982.
- 恩和巴図『満語口語研究』内蒙古：内蒙古大学出版社、1995.
- Eung-Jin Baek "Manchu-Tungusic Languages in China", *Essays in Honor of Ki-Moon Lee*, Seoul: Shin-Gu Publishing Co., 1996
- "A Vowel System of Eighteenth-century Colloquial Manchu", Paper presented at the Korean Altaistic Conference, Sangji University, Wonju, 2001.
- "A Consonant System of Eighteenth-century Manchu", Paper presented at the 5th Seoul International Altaistic Conference, Seoul National University, Seoul, 2002

Bernard Comrie *The Languages of the Soviet Union*, Cambridge: Cambridge University Press, 1981.

Ju-Won Kim "Vowel Harmony in Nanay" *Journal of Korean Linguistics* 17, The Society of Korean Linguistics, Seoul, 1988.

Gisaburo N. Kiyose *A Study of the Jurchen Language and Script*, Kyoto: Horitsu-bunka-sha, 1977

Paul Pelliot "LES MOTS A H INITIALE, AUJOURD' H U I AMUIE, DANS LE MONGOL DES XIII^E ET XIV^E" *JOURNAL ASIATIQUE*, AVRIL-JUIN 1925

Nicholas Poppe *Introduction to Altaic Linguistics*, Wiesbaden: Harrassowitz, 1965